夢野久作全集

一書房

夢野久作全集5　一九六九年十一月十五日　第一版第一刷発行
一九七四年六月三十日　第一版第三刷発行
編者　中島河太郎・谷川健一　©杉山龍丸　一九六九年
発行者　竹村一　発行所　株式会社三一書房　東京都千代田区神田駿河台二の九
郵便番号一〇一　電話東京（二九一）三一三一～五番　振替東京八四一六〇番
印刷所　暁印刷株式会社　製本所　株式会社鈴木製本所

目次

S岬西洋婦人絞殺事件 5
超人髯野博士 29
二重心臓 85
眼を開く 147
犬神博士 157
解題（中島河太郎） 335
解説対談（森秀人・谷川健一） 339

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夢野久作全集5

S岬西洋婦人絞殺事件

法医学的な探偵味を含んだ、かつ、残忍性を帯びた事件の実話を書けと言う注文であるが、今ここに書く事件は、遺憾ながら左の三項について、その筋に残っている公式の記録、もしくは筆者のノートと相違している筈である。

一、該事件発生地の地形、関係地名、人名

二、機密事項の内容

三、法医学者の活動範囲

従ってその意味からこの稿は実話と称する資格を欠いているのであるが、ここに都合のいい事に、右の三項はこの実話としてはむしろ傍系的な問題である。冒頭の要求通りの事件の全貌と、つまらない謎が非常にグロテスクな不可解なものに見えた、その真実の経過を明らかにするためには何の妨げにもなっていないのみならず、これを省略、変更した事が、却ってこの事件に対する理解の明瞭度を高めるために役立っていると思う。なお前記三項を偽装し、又は仮装した事は、この事件の真相を記憶している一部の人々の不快とする処かも知れないが、そのさようしなければならなかった理由は、読了後に、自ら首肯され得るであろう。

R市のS岬と言うと日本海に面した風光明媚の景勝である。R市から海越しに、直径、一里半ばかり距たった対岸で、首の細い半島になっている赤土山の松原の中に、西洋人や日本人の別荘がチラホラと建っている処であるが、その内海側の一番突端のコンモリと丸い松林の緑の中に、R市に在る某石油会社の支配人で、有名な愛妻家として、たびたび新聞にゴシップされた事のあるJ・P・ロスコーという×国人の住宅が建っていた。見るからに蕭洒（しょうしゃ）なバンガロー風の青ペンキ塗、平屋建で、対岸のR市から眺めると、三丁ばかり離れて建っている倫陀療養院の赤い屋根と、偶然の美しいコントラストを作っているのであるが、そのJ・P・ロスコー氏の最愛の夫人で、今年二十四になるマリー・ロスコーと言う美人が大正×年の八月二十何日であったか土曜日の真夜中に、このバンガローの中の寝室で絞殺され、暴行を加えられていた。その時に裏手の少し離れた日本家にいたロスコー家のコック兼小使の東作と言う老人は、奇怪にも酒に酔払って、そこから二百米（メートル）突ばかり隔った半島の突端、外海側に在る低い、小さな岩山の上の、生い茂った草原の中にグーグー眠っていた……と言うのが

事件の発端であった。

その土曜日の晩に、会社で、徹夜の仕事をして、翌る日曜日の朝早く、大急ぎで帰って来た愛妻家のロスコー氏は、昨夜、自分自身の手で、たしかに鍵を掛けて出た筈の玄関の扉が、半分ばかり開いているのを遠くから発見して、ハッとした。大急ぎで吾家に走り込んで、惨酷たらしく変化したマリー夫人の絞殺屍体を一目見ると、そのまま一散に表へ飛出して、意気地なくも、内海の波打際にブッ倒れて気絶しているのを、程経て沙魚釣りのために通りかかった二人の県庁吏員が発見して、程近い倫陀病院に担ぎ込んだ。その院長倫陀博士の応急手当で、ロスコー氏はヤット意識を回復して、前記のような事実を辛うじて物語るには語ったが、元来が西洋人一流の極度にセンチな意気地のない性格らしく、一種の痴呆患者か何ぞのようにボロボロと涙を流して「マリー、マリー」と号哭するばかりで、何が何だかサッパリ要領を得ない。

そこで倫陀院長が気を利かしてタッタ一人いる助手の弓削と言う医学士に命じてロスコー家の様子を見に遣ると、この弓削医学士と言うのが又、そんなような仕事のノンビリした病院の助手らしい探偵小説の耽読者であった。従って相当の好奇心の持主らしく、ロスコー家の寝室に無断で侵入して、夫人の惨死体を発見したが、しかしさすがに屍体には手を触れなかった。そのまま浴室の横を抜けて、裏手の小使部屋に来てみると、かねてから顔と名前だけ知っている東作爺の姿が見えない。怪しんで付近の状況を調べてみると、東作の部屋に繋がっている呼鈴と、S市に通ずる電話線が切断されている。

そこでイヨイヨ好奇心を唆られた弓削医学士は、なおもそこらを隈なく探検しているうちに、意外にもS岬の突端の岩山の上で、大の字型にグーグー眠っている東作爺を探出したので、取あえず揺り起して倫陀病院に連行して、弱り込んだまま寝ているロスコー氏に付添わした。だから東作老人はまだマリー夫人の死骸を見ていないし、死んだ事も気付いていないかも知れない……と言うのが倫陀病院の電話で、R市の警察へ報告された第一話であった。

対岸のR市から時を移さず水上署のモーター端艇に乗って出張して来た蒲生検事、市川予審判事、R市警察司法主任（警部）巡査、刑事、警察医、書記等、数名の一行は、まず一名の刑事を倫陀病院に派してロスコー氏と東作老人の動静を監視させた。それからマリー夫人の屍体を調査すると、マリー夫人と言うのは西洋婦人としては小柄な方で、二十歳ぐらいに見える丸々と肥った、南欧式の肉感的な美人であったが、枕元の豆スタンドから引離した黒絹の被覆コードをグルグルと首に巻付け、乱れた金髪のカールを顔面一パイにヘバリ付かせた中から、青い両眼をクワッと見開き、白くなった小さな唇から、大きな赤黒い血の塊をダラリと腮の下へ吐出し、薄い、青絹の寝衣を胸の処までマ

クリ上げたまま虚空を摑んで悶絶している状態は、トテモ凄惨で二目と見られた姿ではなかった。ロスコー氏がタッタ一目で仰天して気絶してしまったのも無理はないと思われた。むろん疑いもない電燈コードによる絞殺死体で、格闘の際の出来事であろう、舌の途中を大きく嚙み切っていることが間もなく警察医によって発見された。

なお薄青い寝衣の肱の曲目と、肩と、臀部の真背後の処が破れているのが、猛悪な格闘のあった事を物語っているが、それよりも何よりも警官たちを驚かしたのはマリー夫人の肉体であった。西洋人には珍しい餅肌の、雪のように白い背部から両腕、臀部にかけて、奇妙に歪んだ恰好の薔薇と、百合と、雲と、星とをベタ一面に入乱れて刺青して在った。特にコンナ事にかけては気の弱いのを特徴とする若い、美しい西洋人が、コレ程の刺青をするのに、どれ程の気強さと忍耐力を要したかを考えただけでも、身の毛が粟立つくらいであった。

これを見た係官たちはこの事件に対して今までにない一種異様な緊張味を感じたらしい。平常よりもズット熱心に捜査に従事した結果、いろいろな興味深い事実が次から次に判明して来た。

犯人の忍び込んだ処はロスコー家のバルコニーの真下に当る重たい板戸で、俗に万能鍵と名付くる、専門の犯罪用具の中でも最も精巧なものを使用してコジリ開けたものである事が、鍵穴を解剖した結果判明した。それから犯人は玄関の内側に面した鍵の掛かっていない扉を押開いて夫人の寝室に侵入し、寝台の上で夫人と格闘してこれを絞殺した以外には、一物も奪い得ずに逃走した事実……等々々が、何の苦もなく推定されたが、ここに困るのはそれ以外の、室外に於ける犯人の行動がサッパリわからない事であった。

ロスコー家の周囲の松原には砂まじりの赤土の中から丸い石が一面にゴロゴロと露出していて、苔があまり生えていない。そのために靴で踏んでも素足で歩いても足跡が全然残らないようになっていた。しかしその石のゴロゴロした松原の周囲は、岬の突端に在る松林続きの岩山を除いた全部が、真白い綺麗な石英質の砂浜になっているのだから、犯人がその岩山伝いに松原を潜って来て、帰りにも又おなじ筋道を逆行しない限り、その松林の周囲のどこかの砂原に足跡が残っていなければならない筈であった。然るにその砂浜に残っている足跡と言っては、対岸のR市から波際伝いに歩いて来た二人の沙魚釣男のソレと、その前に郊外電車の停留場から、やはり海岸伝いに帰って来て、マリー夫人の死骸を見て仰天し、波打際でブッ倒れた迄のロスコー氏の靴跡を除いては何一つ発見出来なかった。してみると犯人は闇夜の海上伝いにどこからか泳いで来るか、又は船を漕いで来て、岬の突端の岩山を越えて来たものでなければならない筈であるが、それは、余程この辺の地理に精通している上に、そうした汐時と汐先の加減を十分知り抜いていない限り、ずいぶん当てずっぽうな冒険的な遣り方

で成功したものと考えなければならなかった。のみならず、その問題の岩山の上には、酔っ払っていたとは言えロスコー家の雇人の東作が寝ていたと言うのだから、話が何となく妙チキリンである。たとい東作を犯人として考えても、何となく辻褄の合わない処があるように考えられる。

そんな事が評議、研究されているうちに、間もなく正午過ぎになると、又々異様なものが、このバンガローの中から次から次に発見されて、係官たちを面喰らわせた。

その第一は玄関の奥に、台所と隣合って設計されている浴室の立派な事であった。それはマリー夫人の寝床の下から発見された鍵束でヤット開かれたものであったが、超モダンな分離派式タイル張りの三坪ばかりの部屋の天井と四壁に、贅沢にも十数個の電球と、合計七個の大小の鏡を取付けた馬鹿馬鹿しいとも形容さるべき構造で、ロスコー夫妻の頽廃的な趣味を露骨に裏書きしたものであった。

それから第二は寝室（犯行現場）の隣室になっているロスコー氏の書斎の一隅に在る粗末な木製の本箱を、一人の刑事が何気なく取除いてみると、その向側の壁に塗込んである極めて旧式の小型金庫が発見された事であった。その金庫は無論日本製のものであったが、その金庫を発見した刑事が、何かしら胡散臭いと思ったのであろう、持っていたマリー夫人の鍵束でコジリ廻して、出鱈目にマリーと言う三字の片仮名の記号を引っかけてみると、偶然の一発当りで開いた。その中の棚には一々薄紙に包んだ沢山の写真と、英文の美事な細字で認めた原稿ようの西洋型罫紙の大部な綴込と、西洋式の刺青の道具を納めた大きな銀の箱とが重なり合っていたが、中にもその夥しい写真と言うのは全部、世界各国人の各階級を網羅したものらしい刺青の写真ばかりで、驚くべき事にはそれ等の刺青の中に、新聞や雑誌で紹介されている各国の貴顕、名士、スター級の映画女優の顔がチラリチラリと混っているばかりでなく、更に更に驚くべき事には、マリー夫人その人の刺青、ロスコー氏自身、及びコック兼小使の東作の前身に相違ないと思われる若い日本人の顔と、その首から下に属する刺青とが各一枚宛、美事な印画紙に焼付けられているのが発見された事であった。

その中でマリー夫人の刺青の図柄は前述の通りであるが、ロスコー氏自身のものは精密な西洋古代の海戦の単色彫り、又、東作のは吉原の花魁道中の図で、これは又ロスコー氏の分と正反対に暈かし、色彫り、化粧彫りなぞ言う、あらゆる刺青の秘技を発揮した豪華版が、そっくりその通りに水彩顔料で彩色されたものであった。

こうした数々の発見は、さすがの事件に慣れた警官たちを少なからず面喰らわせた。

最初は金品の紛失が一つも発見されない処から、単なる痴情関係から起った事件ではないかと言う考えが、期せずして一同の頭に浮かんでいたらしかったが、こうした途方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もない発見が次から次に出て来ると、その単なる西洋婦人殺しの裏面に潜んでいる事情が、何かしら複雑を通り越した、恐ろしく怪奇な、むしろ神秘めいたものではないかと言う感じが、一同の頭を次第に動揺させ始めたのであった。

一方には倫陀療養院から召喚された東作爺が、ロスコー家裏手の日本家自室で、厳重な取調べを受けたのであったが、その申立の内容にも、相当に怪奇な分子が含まれていた。

東作の全身には、ロスコー氏の金庫の中から発見された写真と同様の刺青がたしかに存在していた。それはその撮影と彩色の技術が如何に巧妙な、かつ優秀なものであるかを事実に証明しているものであったが、本人自身はその背負っている刺青の威勢のヨサにも似合わず、ただもう恐れ入った篤実そのもののような態度で、ビクリビクリと訊問に応ずるのであった。

「私は三十年ばかり前からコック兼掃除男として御当家ロスコー様に御奉公申上げている者で御座います。お給金は毎月八十円を頂戴しまして、R市で玉突屋を致しております実の娘と大学生の養子夫婦に毎月六十円ずつ分けて遣りまして、残りの二十円を煙草代と酒代にしながら気楽な日を送っておりますような事で、貯金もただ今は二千円余り御座いますので、死んだ後の事なぞチットモ心配しておりません。

ただ今のロスコー様の御夫婦仲はまことにお宜しいようで……ことにお二人の中でも奥様のマリー様は見かけに寄らない気の強いお方で御座います。御主人が御心配なさるのを振切ってコンナ淋しい所に地面をお求めになって、御自分のお好みの通りの家をお建てになって、タッタ一人でお留守番をなさるのですからエライもので、雪の降る日や雨風の日などは、遠い郊外電車の停留場から歩いてお帰りになる御主人様が、却ってお気の毒でなりません。そのような話を私から聞きました娘夫婦も驚いて感心しておりますような事で……又、御主人のロスコー様の方は万事にお気の小さい、優しい一方の御方で御座いますが……それよりほかに御二方の日常の御生活につきましては、詳しく存じも致しませぬし、申上げる事も御座いません。

昨夜はロスコーの若旦那様が私に『今夜はかなり遅くなる見込みだから戸締りを厳重にして早く寝なさい。表の玄関の合鍵は私が持って行くから裏口の締りだけ頼みます』と言ったようなお話で、そのままお出かけになりましたので、日が暮れると奥様にお夕飯を差上げましてから直ぐに、この部屋に引取りまして、久し振りに手酌でユックリと一杯飲んで寝ました。

ところが年寄の癖で、夜中に小便に行きたくなりまして眼がさめますと、平生に以合わず頭が割れるように痛んでおりました。しかし白昼のようにいい月で御座いましたから、竹の皮の庭草履を穿きまして、裏の松原に出て用を足

しますと、夕方の飲み残りの酒を持って松原を抜けまして、外海岸の岩山に登って、そこの草原で燗瓶の口から喇叭を吹きながら、銀のように打ち寄せて来る真夜中の大潮を見ておりまするうちに、迎え酒が利きましたかして、又グッスリと眠ってしまったらしゅう御座います。そのうちに先刻の倫陀病院の代診さんに起されまして、ロスコー様が海岸にブッ倒れて御座ったのを、タッタ今倫陀病院に担ぎ込んでいる。様子がおかしいから直ぐに介抱に来てくれと言われました時には、ビックリ致しました。……いいえ。まったくで御座います。マリー様がお亡くなりになりました事を聞きましたのは今が初めてで……何とも早申上げようも御座いません。いつも奥様から励まされ励まされしてヤット会社へお出かけになっておりました位気の弱いロスコー様が、あのようにお取乱しになるのも御尤もな事で。

私はただ今、夜露に打たれましたせいか、身体中が骨を引抜かれたようにカッタルう御座います。おまけに胸がムカ付いて眼がまわりますようで、口の中に腐った樟脳のような臭気が致しまして……コンナ気持ちは生まれて初めて御座います。そんな次第で御座いますから、マリー様がお亡くなりになりました事に就いては、私は全く何も存じませんので……ヘイ。それよりもロスコーの若旦那様の眼付が、今朝から少し変テコで御座いますので、そればかり心配致しております。お話の通りで御座いますなら、やはり心からマリー様のお亡くなりになった事を悲しんでお出でになるので御座いましょう。お一人でおったら、何をなさるか解らない気が致しますが、大丈夫で御座いましょうか。ずっと前に香港でマリー様との御婚約が破れそうになった時にも、ロスコー様はやはり、あんな様なヒステリーじみた御容態になられましたもので、私はこう申しますうちに何となく、気になって気になってたまらないので御座います」

そんな事を繰返し繰返し言いながら東作は白髪頭をシッカリと抱え込んで考えている。そのほかロスコー家の過去に就いては何を尋ねても返事をしない。特に刺青に関係した事となると牡蠣のように口を噤んでしまう。刺青の写真を突付けられても、冷たい眼でジロリと見たきり、頭を頑強に左右に振るばかりで、一言も洩らさない態度が、極度に野蛮な、反抗的なものに見える。……のみならずその昨夜と言うのは陰暦二十九日の暗夜で、月なんぞは出なかった筈なのに、白昼のような満月が光っていたというのが頗る怪訝しい。なるほど大潮には相違なかったが、測候所に問合わせる迄もない夜通しの曇空で、月どころか、星の影も見えなかった筈だが……と何度念を押しても東作爺はただビックリした顔で、不思議そうに警官の顔を見まわすばかりである。しまいには頭が痛いせいか、面倒臭そうに眼を閉じて、

「それは旦那方が旧の暦日を御存じないからです。昨夜はたしかに旧の十五日に間違いなかったのです。たしかにマ

ン丸いお月様が出ておりました」

と落ち着いて頑張る表情が如何にも真剣で、不思議であった。だから、とにかく現在の処では東作が一番怪しい。とりあえずマリー夫人殺しの嫌疑者として拘引してみようではないかと言う事に係官の意見が一致した。そうしてこの上は程遠からぬ倫陀病院に行って、直接ロスコー氏に就いて前後の事情を訊問して、何等かの手がかりを摑むよりほかに方法はないと言うので、係官の一行が、やがてロスコー家を引上げて出かけようとしている処へ、今まで倫陀病院でロスコー氏に付添っていた代診の弓削医学士が、白い服を着たまま息堰き切って転がり込んで来た。その報告を聞いてみると又、一大事である。

最前からマリーマリーと連呼して泣きじゃくっていたロスコー氏が突然に静かになった。寝台の上に起き直って両腕をシッカリと組んで動かなくなった。僅かな間に見違えるほど物凄く痩せ衰えた顔に両眼をジイッと据えて、窓の外の青空を凝視したまま黙りこくっているうちに、その眼の色が次第次第に物凄くなり、真夜中のようにギリリギリリと歯を嚙み鳴らし始め、突然、精神に異常を呈したらしく、そこいらに在る品物を取っては投げ……取っては投げするので、危なくて近寄れない。そのうちにタッタ今のこと、隙を窺ったロスコー氏は哀れにもポケットからピストルを取出し、自分の頭の顳顬上部を射撃して自殺してしまった。今すこし早く精神異常者と認めて処置しなかった事を、院長初め非常に恐縮している……と言う話であった。

係官の一行は今更のように狼狽した。まだ息を切らしている弓削医学士と一緒に現場に急行してみると、正に報告の通りで、裏庭の外海に面しているロスコー氏の病室内は、額縁や、薬瓶、植木鉢、泥、砂礫、草花、その他の器物や硝子の破片が、足の踏場もなく散乱している中に、脳漿が飛散り、碧い両眼を飛出さしたロスコー氏が、鮮血の網を引被ったまま穢れたピストルをシッカリと握って、寝台の上から真逆様に辷り落ちている光景は、マリー夫人の死状にも増して凄惨な、恐怖的なものであった。

警察の捜査方針はここに於て五里霧中に彷徨する事となった。出ない月を見た東作の陳述だの、事件の全体に因縁深く蔽い被さっているらしい英文の刺青に関する書類や写真だの、その説明の鍵を握っていたであろうロスコー氏の突然の発狂自殺など言う事実なぞを重ね合わせて考えてみると、蒲生検事を初め係官一同のアタマが、いつの間にか実際的な着眼点を見失って、探偵小説式な架空や想像、推理の渦巻の中にグングン巻込まれて行くのであった。全体に痴情事件らしく見えながら、半分は巧妙な窃盗犯の手口も加味されている。単なる他殺が単なる他殺でなく、単なる自殺が単なる自殺でない……と言った風に考えなければ、大変な間違いに陥りそうな気がして来たので、さすがに老練の蒲生検事もウッカリ断定が下せなくなった。類犯ばかりを標準にして判断を付けるのが習慣のようになっている

刑事連中などは、ただもう面喰ってしまっていた。これは到底吾々の手に合う事件じゃない。毛唐人の気持ちなんか吾々にわからないんだから……などと逃腰になる者さえいた。

以上の報告を司法主任の警部から詳細に亙って聴取したR市警察の山口老署長も、やはり判断に迷ってしまったのであった。

普通の場合だと検事に対する部下の不平なぞを聴いて遣って、シッカリ頼む……とか何とか激励するだけで、差出た意見を付加えたり何かしないのが、温厚を以て聞こえた山口老署長の本分みたような習慣になっていたのが、今度という今度ばかりは例外になって来た。……と言うのは丁度その時に県庁の特高課が、ロスコー氏の自殺を重視している事がわかった。確かな理由は不明であるが、ロスコー氏の行動はズット以前から極秘密に特高課の監視を受けていたものらしく、その自殺を聞知した私服の特高課、外事課員が二人、山口署長に極秘密で面会し、事件の真相を聴取したいと申出た。その序に……ロスコー氏の奉職している石油会社の本社でもこのS岬事件を相当重視しているらしい。R市支社の重役で日本語の達者なドラン氏が本日、知合いの特高課長の処へ出頭して、ロスコー氏の死因は自殺か、他殺か。本国へ打電する必要があるから極く内々で説明して貰いたい。東京の本社から人事係長（外人）と海軍大尉上りの日本人重役の二名が本日午後の急行で東京を出発したと言う電報が来たから、その二名が到着しない前に真相が判明していないと自分の責任になる虞があるので是非説明して欲しい。さもなければ当市の裁判所の検事か警察署長に紹介して貰いたい……と言うので非常に鄭重な態度で哀訴歎願して来た……と言う事実を外事課員が洩らしたので俄然、事態が二重、三重の意味で緊張して来た。さすがに着実温厚を以て聞こえた老署長も、これには少々狼狽させられた。さもなくとも正体の摑みにくい事件の真相を最大限二、三日のうちに片付けなければ、日本の警察の威信に関するのみならず、愚図愚図すると面倒な国際問題にまでも引っかかって行きそうな形勢になって来たので、ジッとしておれなくなった。

ところが幸いに最初からこのS岬事件に関係していた蒲生検事は、署長の同郷で、懇意な間柄だったので、そこに一道の活路が見出された。山口老署長は、やはりその夜のうちに極秘密で蒲生検事に面会していろいろと懇談を遂げた結果、とにかくその「刺青」なるものに就いて専門家の意見を聞いた上で、何とか方針をきめる事にしたら、どうであろう。いずれにしても、そんな奇怪な書類を中心にして、刺青をした人間ばかりが寄り集まっている点が不思議と言えば不思議である。しかも「刺青」の話に関する限り東作爺が頑として口を開かない処を見ると、そこに事件の秘密を解く鍵が隠れているのじゃないか……と言ったような事にアラカタ意見が一致したが、しかしR市のような比

較的狭小な都市に刺青の研究家なぞ言う者はいそうにない。むろん別にコレと言う程の心当りもないので、取あえず、これも署長の小学時代の同窓として懇意なR大学の法医学教授、犬田博士を招いて、意見を聞いてみてはどうであろう……と言う事になった。

出張から帰ると間もなく、山口老署長から詳細の話を聞いた法医学教授犬田博士は、老境に及んで激務に従事している旧友の立場に、同情したものであった。

「それは丁度よい処へ来てくれて有難い。僕は今まで法医学研究の立場から、刺青に関する研究をやってみたいと考えているにはいた。刺青というものを各国別と各職業別の双方の観点から研究して整理する事は非常に困難な、同時に貴重な仕事で、現に僕も独逸人と仏蘭西人の著書を一冊宛持っているにはいるが、しかし君の話を聞いてみるとそのロスコー氏の研究こそは僕の理想に近いものではないかと考えられる。とにかくそのような熱心な刺青の研究家がこの付近にいる事は全く知らなかったのだが、是非とも同行してそのロスコー氏の遺物である刺青の研究の書類を見せて貰いたいものだ」

と言うので即日、R警察署に出頭し、蒲生検事、市川予審判事、山口署長、特高課員、司法主任立会いの上で、R署に保管して在ったS岬事件の被害者マリー夫人と、自殺者ロスコー氏の屍体に残っている刺青のブロマイド写真を見せて貰って、極めて念入りな比較研究を遂げた。次いで例のロスコー家の、日本製の金庫の中から出て来た書類や写真のそこここを拡大鏡で精細に覗きまわり、最後に刺青の道具を容れた銀の箱を開き、片隅に詰めて在る、小さなアルコールとコカインの中味を嗅ぎ比べ、または甜め、India Rabber と彫った小型の銀筥の中の青墨をコカインに溶いて手の甲に塗ってみるなぞ、相当時間をかけた熱心な調査の後に、胡麻塩頭をモジャモジャと掻きまわし、山羊鬚を撫で揃え、瘠せこけた身体に引っかけた羊羹色のフロックコートの襟をコスリ直した犬田博士は顔を真赤にして謙遜した。

「この程度の説明なら、私にも出来ますが……」

とニコニコ顔で近眼鏡を拭き拭き一同に向って咳払いをした。

「これはドウモ貴重な文献ですな。この書類は皆ロスコー氏の父君、M・A・ロスコー氏と、今度自殺されたと言うJ・P・ロスコー氏の合同の研究に係るもので、刺青の技術を主眼とした各国別と各職業別になっておりまして、恐らくこの原稿が出版されましたならば、世界有数の権威ある刺青の研究書になるであろうと信じます。

冒頭の序文に拠りますと、全体の約三分の二が父M・A・ロスコー氏の蒐集写真と、その記述に係っており、後尾、約三分の一は子息、J・P・ロスコー氏の仕事と言う事になっております。各項の末尾に、それぞれ調査日付とロ

スコー父子もしくは篤志な寄稿家の署名が添えて在ります。

なお序文に拠りますと、父、M・A・ロスコー氏は×国の化学者サア・ロスコー氏の近親で、有名な大政治家G卿と、その政敵のS卿の両氏から同時に信用されていた外交官だったそうです。そのM・A・ロスコー氏の足跡は西班牙、土耳古、智利、日本、等々の一、二等書記官どころを転転し、最後に支那、香港の領事として着任しているようですが、その間に自分の趣味として手の及ぶ限り刺青に関する写真や文献を蒐集したもので、しかも自身に各地の刺青の技術者に就いて実地の研究を遂げ、結局、支那と日本の技術が世界的、最優秀である旨を、一々的確な例証を挙げて記述しているのですから、驚くべく真剣な研究と考えなければなりません。

一番最初に掲げて在る一枚は一八八六年に撮ったルーマニアの皇族フロリアニ伯爵とありますが、それから後に着手された調査が、今日まで約四十年の長月日に亙っておりまして、途中一九一九年に到って子息のJ・P・ロスコー氏が父の死により研究を引受けた旨が記載して在ります。

問題の東作の刺青の写真は相当古いようです。日付は一九〇四年四月になっておりますし、刺青の手法は全然日本式で、しかも徳川時代の遺法を墨守していた維新後二十年以内の図柄ですから、東作は兎にも角にも先代のロスコー氏を、よく知っている筈と思われます。

また息子のJ・P・ロスコー氏の屍体に残っている刺青は、左の二の腕に彫って在る分を除き、背部の全面がサラミス海戦の図になっておりまして、その古代船艦や、波濤や、空を飛ぶ神々の姿まで、非常に細かい線描になっているようですが、それがどこまでもムラのない黒一色でボカシも何もない。その細い線の断続の工合から見ても、明らかにコカインの使用法を知らない、外国でも旧式の手法に属するもので、事によると父、M・A・ロスコー氏が練習のために自身で施術して遺ったものではないかと言う想像が可能のようです。

それからその次に非常に面白い事があります。それは外でもありません。自殺したJ・P・ロスコー氏の左の二の腕に在る刺青と、マリー夫人の全身のソレとは全然手法が一致している事です。もっとも図柄は全然違います。ロスコー氏の左腕のは、錨と海蛇を組合わせた、海員仲間にありふれた種類のものです。これに反してマリー夫人のは優しい花や星なぞですが、いずれも局部を麻痺させるためにコカインを使用したものらしく、ロスコー氏の背部のソレよりもかなり濃厚、明確な線を用い、図形が近代画の手法で歪められておりまして、雲や星なぞ、後期印象派の匂いの高い曲線や不整直線を用いている点が共通している処を見ますと、夫人の肉体に対する若いロスコー氏の変態恋愛、もしくはマリー夫人のロスコー氏に対するマゾヒスムス傾向の両者が生み出した要求のあらわれではないか。その結果こうした若い西洋婦人としては稀有の施術が行なわれた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com